

二つの〈ケア〉の視点が、 病院と在宅を繋ぐ。

チームケア特集

みよし市民病院

企画制作〇中日新聞広告局 編集〇プロジェクトリンクト事務局



変化の発見者と、療養生活の設計者。二つの専門性がケアを繋ぐ。

愛知県みよし市にある、みよし市民病院は、二つのケアを大切にして、患者の在宅復帰を支えている。二つのケアとは何か？そして、その相乗効果とは？ 稲垣 恵看護師と杉森 要介護士の二人を通して紹介する。

CHAPTER 1 患者自身の力を引き出す、二つのアプローチ。

杉森 要は介護福祉士である。主な仕事は、病棟でのおむつやシーツ交換、食事や入浴介助など、生活全般の援助だ。但し、単に身の回りの世話をしているだけではなく、そうした業務を通して、介

護の視点から見た患者の様子を、看護師にフィードバックする。杉森は言う。「日常生活に密着していると、患者さんの表情や言葉、動作のほんの小さな変化にも気づきます。それを看護師に正確に伝え、協力して支えるのが、僕たちの大きな役割ですね」。いわば「変化の発見者」、それが杉森たち介護士だ。

その存在を「とてもありがたい」と

言うのは、看護師の稻垣 恵である。「患者さんの変化を、生活行為レベルで実際に細かく見てくれています。自分の業務が重なり忙しいとき、介護士から得た情報はとても貴重で、アセスメントに大きく役立ちます」と言う。

アセスメントとは、分析、推測、評価を意味する。すなわち、患者の全身管理をするなか、患者の状態を観察し、

言うのは、看護師の稻垣 恵である。「患者さんの変化を、生活行為レベルで実際に細かく見てくれています。自分の業務が重なり忙しいとき、介護士から得た情報はとても貴重で、アセスメントに大きく役立ちます」と言う。

看護師は、その患者さんに合ったより的確なケアの提供に繋がります」。つまり、看護師は「療養生活の設計者」。患者の変化の発見者である介護士とともに、日々のケア提供を推進する。

杉森は、患者にリズムのある明るくて楽しい生活を提供するため、季節のイベントなどにも工夫を凝らす。稻垣は、患者一人ひとりの動きに合わせた看護を見つめ、創造力と応用力を活かした看護の提供に力を注ぐ。「一人とも」この病院で働く仲間がもっと増えるとうれしい」と声を揃える。

COLUMN

稲垣がいる地域包括ケア病床は、入院の最長期間は60日である。稲垣は「それをお話しすると、ご家族はホッとされます。でも、本当はこの病床から在宅療養が始まるんです。だから決して長くはありません。大切なのは、患者と家族と医療スタッフが、同じ目標を持つことです」と言う。

●ケアのさらなる充実をめざして、みよし市民病院では、看護・介護職の材確保に力を入れている。例えば、認定看護師、専門看護師などのリソースナースの獲得。「有資格者の導入をはじめ、資格取得を希望する人材には、既存職員はもちろん、中途採用者でも支援していきたいと考えます」と総看護師長の尾崎真代は言う。

一方、介護スタッフに対する思いも強い。尾崎は、「院内では介護福祉士・ヘルパー2級の有資格者を「ヘルパー」と呼び、チーム医療の大切な一員として位置づけています。彼らの意識はとても高いですね」。今後は、介護福祉士やヘルパー2級の資格を持たない人材でも、積極的に採用する方針だ。「介護をやってみたいという方は多いので、その希望を当院で実現していただけたらと思います」。

●なお、チーム医療という枠組みでのケアの充実に目を轉じると、薬剤師やリハビリスタッフのさらなる拡充も、同院には重要な課題といえる。

そのときどきに何が問題として起つているかを考察。そのために何らかの対応が必要な際は、それに関わる多職種に対しても適切な指示、協力を求めていく。看護師の業務のなかでも基本的で重要なものだ。

稻垣は言う。「看護師は、一人ひとり

の患者さんに望ましい退院後の生活の質を見つめ、科学的な根拠をもとに入院生活を設計、実施します。めざすのは、在宅で生活するために、患者さんの日常生活の力を引き出すこと。例えば、自分で薬の管理をする、夜はおむつでも昼間は自分でトイレに行くなど、めざす行為の一つひとつを、全身状態に合わせて、いつからどういう段階を踏んで行うのかを、患者さんごとに組み立てていくことになります。そのもとに

いるのが、観察。看護師の目と、異なる視点である介護士の目が加わることは、その患者さんに合ったより的確なケアの提供に繋がります」。

つまり、看護師は「療養生活の設計者」。患者の変化の発見者である介護士とともに、日々のケア提供を推進する。

病院を
知ろう

中日新聞
「リンクト」**LINKED
plus+**

入院判定会議、支援連携会議、家屋調査、転棟会議などなど。

杉森は看護師とともに、

参加する。

「当院にはさまざまな会議、カンファレンスがあります。

多職種の視点を理解することが、患者さん個々のニーズに合った適切なケアを提供するのにとても大切だと知りました」と、

杉森は言う。



CHAPTER 2

それぞれの専門性を理解し、連携をさらなる高みへ。

超高齢社会にあって、高齢患者の急増が予測され、限りある医療資源、財源を効率よく活かすために、国は、病院医療中心から在宅医療に重きを置く方向性を定めた。今後は、必要なときだけ入院治療し、あとは在宅で療養しながら生活するスタイルとなる。

短い入院、在宅での療養生活。そこでは生じる患者や家族の不安を少しでも軽減し、安心して過ごすことができるよう、大きな期待が持たれているのがケミックスの病院である。患者の病態に沿つて異なる種類の病床を持ち、在宅への道筋を創り上げる病院だ。そこでの課題は、病院と在宅とをいかにシームレスに繋ぐかである。

その鍵を握るのは「ケアです」と、総看護師長の尾崎真代看護師は言う。ケアとは、患者が安全で安心して、自分の力を發揮して生活できるように援助していくものだ。「その扱い手は、看護師であり介護士です。共通するものは、観察する力。違いは、その観察力で、看護師は療養生活を設計し、介護士は患者の変化を発見すること。そして二つの専門性が重なったところに、充実したケアが生まれます。ケアが高まれば高まるほど、患者さんやご家族は、在宅

での療養生活を現実感のあるものとして、受け止めることができると考えます」。

となると、看護師と介護士、その専門性の追求が重要となる。「そのとおりです。両者が互いの異なる特性を正確に理解した上で、いかにそれぞれの専門性を高めるか。当院は急性期治療だけではなく、そのあとの段階も、また、在宅で急性増悪したときも、長期入院が

院としてのケア能力向上に全力を注ぎ、地域の皆さんを支えていきたいですね」。

BACK STAGE

地域包括ケア病床こそが、みよし市民病院の本質。

● 稲垣 恵看護師が勤務するのは、地域包括ケア病床である。これは高齢社会を見据え誕生した、新しい病床区分。二次救急患者の受け入れ、急性期治療を終えた患者の受け入れ、そして、在宅療養中の患者の急性増悪時の受け入れに対応するとともに、在宅への復帰支援を担う病床である。みよし市民病院は、平成28年にこの病床を開設した。

● 同院がこの病床を持ったことは、まさにこの病院のあり方を示しているといえよう。すなわち、同院が現在の地に病院移転をしたときから、設計思想として、地域密着、生活目線が組み込まれており、医療の変化を見つめ、高齢社会で真に必要と考える機能の充実を、常に図ってきたのだ。

● 「ケア」をキーワードに、急性期能力を活かしつつ、異なる領域を有機的に結び、市民とともに歩む、みよし市民病院。その姿は、これから自治体病院のあり方の一つを指し示している。

企画制作
中日新聞広告局

編集協力

みよし市民病院

〒470-0224

愛知県みよし市三好町八和田山15

TEL 0561-33-3300(代表)

FAX 0561-33-3308

<http://www.hospital-miyoshi.jp/>

お問い合わせ

中日新聞広告局広告開発部

TEL 052-221-0694

FAX 052-212-0434

プロジェクトリンクト事務局

TEL 052-884-7831

FAX 052-884-7833

<http://www.project-linked.jp/>

プロジェクトリンクト

検索

LINKED VOL.28 タイアップ

病院を
知ろう

中日新聞
「リンクト」LINKED
plus+